九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Does Modic Change Progress With Age?

樽角, 清志

https://hdl.handle.net/2324/1959193

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（別紙様式２）

氏　　名	樽角　清志
論　文　名	Does Modic Change Progress With Age?
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　本田　浩 副　査　　九州大学　　教授　　飯原　弘二 副　査　　九州大学　　教授　　小田　義直

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

Modic Changeとは1988年Modicらによって発表されたMRIにおける椎体終板から椎体にかけての異常信号の分類方法である。この報告後約30年間、Modic Changeの臨床的特性、腰痛との関連、適切な治療方法、発生率、自然経過など多くの報告がされたが未だに解明されていない部分が多い。過去の報告では年齢に伴い Modic Changeの発生率が上昇していくという報告が多く見られる。しかし、これらの報告は比較的若年層を対象としたものであり60歳代までの上昇を報告している。我々が日々治療対象としている患者の年齢層は大幅に上昇しているにも関わらずModic Changeにおける高齢者のデータは報告されていなかった。そこで実際にModic Changeの発生率が年齢とともに上昇し続けるのかを検証するために高齢患者を含んだ各年齢層におけるModic Changeの発生率を検証した。九州大学病院別府病院で腰椎MRIを撮影した585人の患者を対象とした。MRI T1,T2強調、矢状断面画像で評価しModic Type1(T1低信号,T2高信号), Type2（T1,T2高信号）, Type3（T1,T2低信号）, Mixed Type（分類不能）の4つに分類し、Modic Changeの発生率を各年齢層に基づいて比較した。対象患者の平均年齢は65歳で70歳代が最も多かった。Modic Changeの各年齢層における発生率は10歳代が0%、20歳代が10%、30歳代が33%、40歳代が27%、50歳代が32%、60歳代が44%、70歳代が42%、80歳代が26%で、80歳代の発生率は70歳代の発生率に比べて優位に低かった(P=0.0086）。Modic Changeの発生率はある年齢層までは上昇するが70歳代以降に減少する傾向にあった。これらの結果は高齢者脊椎疾患を治療する際の参考になると思われる。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。